

2022年10月21日(金)

老球の細道696号

名コーチとの出会い「世界のコーチ、トスティン・ロイブル」⑧

会津バスケットボール協会 室井 富仁

作家内館牧子の本で『老害の人』というのが累計100万部を突破する大人気らしい。本の新聞広告を見ると「昔話に長い説教、趣味の講釈、病氣自慢に孫自慢。そうかと思えば、無気力、そしてクレマー。迷惑なの！と言われても、どうにも止まらない」などと書いてあり、思わず私のことだと恥じた。しかし、もう少しアメリカでの話を付き合ってほしい。

【サザンカリフォルニア大学(USC)練習見学】

アメリカンフットボール、水泳では全米屈指の実力を誇る大学であるが、バスケットボールもそれなりの実力を持つ名門校である。ヘッドコーチはジョージ・ラベリング。

彼はロサンゼルス五輪(1984年)で天才コーチと称されたボビー・ナイト(当時インディアナ大学)ヘッドコーチの下、マイケル・ジョーダン(当時プロ入り前のノースカロライナ大学)等を擁した全米代表チームのアシスタントコーチを務め金メダルを獲得した。

ロス五輪決勝戦の米国対スペイン戦は私が原町高校時代にテレビ放映があり観戦していた。その時はヘッドコーチのナイトとジョーダンしか目に入らず、ラベリング氏には気がつかなかった。彼からは日々の練習における練習メニュー用紙をもらい、退職するまで指導したチームにおいて利用させてもらった。米国でも超有名なラベリング氏でも、毎日の練習には練習メニュー表を持参し、そこにはドリルの内容、コーチングポイント、その日の名言、箴言などを書く欄があり、びっしり文字で埋め尽くされる。まさに成功は準備から。

当時USCにはオールアメリカンに選出されたプレイヤーがいた。NCAAマニアの人は知っているだろうが、後に「ベビー・ジョーダン」と称されたハロルド・マイナー選手である。類まれな身体能力を持つ黒人選手で、チーム内でも光輝いていた。

USCの体育館は大学の校舎内にあり(アリーナとして独立していない)、コートも1面を少し大きくしたくらいだった。そこで練習は2時間集中して行われていた。内容はすべてゲームで起こりえる場面を想定したもので無駄がない。特に印象に残ったのは「ゲット・オープン」ドリルで、3人一組になりディナイディフェンスからボールをレシーブするカット(Vカット、Lカット、カールカット等)をパス、ディフェンス、オフenseと役割分担で繰り返していた。このドリルも日本へ帰って来てから大いに利用させてもらった。

コーチングスタッフが6人位いた。コーチ全員がコートの中で常に目を光らせており、選手は絶対手抜きができない状況で練習に取り組んでいた。日本ではほとんどのチームが1人のコーチの指導なので、日米の差はこの辺から出るのかと感じさせられた。

練習着は全員統一されたユニフォームだが、レギュラーとサブではユニフォームの色が区別され否応なく競争心を煽られる状態である。練習内容もユニフォームもすべて試合と同じようにやることで(「練習は試合のように、試合は練習のように」)、試合で緊張して力が発揮できなかったということもなくすのだろう。〈トスティン氏までもう少し続く〉